

特集 「Web インテリジェンスとインタラクションの新展開」にあたって

高間 康史

(首都大学東京)

本学会で「Web インテリジェンスとインタラクション」に関する最初の論文特集が掲載されたのが2010年1月号、それからちょうど5年ぶりの特集となる。この5年の間に、Twitter やスマートフォン・タブレットの普及、東日本大震災などを契機とした日本でのオープンデータ化の流れなど、Web には大きな変化が生じており、これに応じて新たなニーズやシーズが生まれてきている。このような背景を鑑み、本特集では「新展開」をタイトルに含め、Web インテリジェンスとインタラクションに新たな展開をもたらす研究を広く募集した。5月の連休直後に締切を延長した効果か、33件もの多数の投稿をいただき、厳正なる査読の結果、原著論文13件、速報論文1件の計14件が採録された。採録率は42%と、当初期待していたよりも低いものとなった。査読者には、本学会の査読基準に加え、アイデアの新規性やユニークさを積極的に評価していただくようお願いしたが、あと少し完成度を高めてから世に出したほうが、論文の価値が高くなるとの判断から不採録と判定された場合が多かったように感じている。残念ながら不採録となった論文の中にもユニークなアイデアに満ちた論文が含まれており、将来的に論文として採録されるポテンシャルを感じさせるものが多かったことを付記しておく。

さて、今回の特集号に投稿された論文と、5年前の特集号に掲載された論文を比較しながら気付いた点を以下にまとめてみた。論文特集号という限られた中での比較であり、Web 研究全体を必ずしも概観したものではない。ゲストエディタの感想として読んでいただければ幸いである。

- (1) コミュニティ検出やネットワーク分析に関する論文は両特集号で複数見られた。感性に関する研究、対話システムに関する研究も両特集に見られ、研究トピックとして継続的に発展している印象を受けた。
- (2) 前回特集のみで見られたテーマとしては、「携帯電話」の表示画面の小ささを課題とした研究、特定人物の同定や情報抽出に関する研究などがあった。これらが今回の特集で見られなかったのは、スマートフォンの台頭、実名が前提のFacebookの普及といったWebの変化も関係していると考えられる。
- (3) 今回、情報推薦、Twitterを対象とした研究、自然言語処理に関する研究への投稿数が相対的に多くなっていた。特に情報推薦、Twitterは前回特集にはなかった新たな展開といえる。一方、採録された論文はそれ

ほど多くなく、盛んに研究されている分採録のしきい値も高くなってきていることがうかがえる。

- (4) LOD (Linked Open Data) 系の投稿が期待していたよりも少なかったが、査読者のコメントなどを見ると、評価が難しいこともその一因という印象を受けた。

採録された14件の論文について簡単に紹介する。井口らの論文は、個人認証の負担なく嗜好に合ったテレビ番組の推薦を行う手法を提案している。林らの論文も情報推薦に関するものであり、ユーザが書いた映画レビューに基づき他者の映画レビューを推薦する手法を提案している。コミュニティ抽出に関する論文も2件あり、仲田らの論文は制約付きコミュニティ抽出の高速化手法、Jarukasemratanaらの論文はスケールフリーネットワークからのコミュニティ抽出手法を提案している。対話システムに関する論文としては、竹腰らはマルチモーダル対話システム開発支援環境に関する論文であり、対話コンテンツとしてLODを活用している。杉山らは、Web コーパスの話題の豊富さを利用した発話生成手法を提案している。検索システムに関連する論文として、酒井らの論文は、Web上で配信されている決算短信PDFに含まれる業績要因を検索するシステム、高間らの論文は動向に対する問いを対象とした検索エンジンを構築している。土斐崎らは、オノマトペを用いた商品検索システムを想定して、画像の特徴と画像の印象を記述したテキストを活用する手法を提案している。ネットワーク分析に関して、白井らの論文はネットワークの構造変化が情報拡散に及ぼす影響について論じており、岩崎らはCGMにおける炎上を同定する手法を提案している。

このほか、Wangらの論文は、スライドベースの教材からインタラクティブなポスターを生成する手法を提案している。吉田らは、集中的に検索されるトレンドクエリの時事カテゴリーを推定する手法を提案している。三宅らの速報論文は医療応用であり、患者の治療意欲の維持に貢献するインタフェースに関するものである。

最後になるが、論文の担当および判定審議をしていたいただいた論文特集編集委員会の皆様、査読者の皆様には多大なご尽力をいただいた。皆様のお名前をあげることは紙面の都合もありできないが、この場を借りてお礼を申し上げたい。機会があれば数年後にまた企画させていただきたいが、本特集がそのときまでに新たな展開を生み出すきっかけとなれば幸いである。